

## 第九章 川越のいも掘り観光農園

### ◆ ふとしたことから始まり

太平洋戦争後の一九五三（昭和二十八）年のことだった。川越市役所商工課の観光係、根生貞次郎さんが川越市今福中台地区なかだいのサツマイモ栽培農家、坂本長治さんながはるの家に来た。

長治さんは一九〇八（明治四十一）年生まれで、根生さんとは軍隊時代からの戦友だった。その根生さんが長治さんのところに突然きたのは、東京のある会社からの、こんな依頼があったからだった。

「今年の秋の従業員慰労大会は川越に行き、家族ぐるみのいも掘り大会をやりたいとなった。ついでには川越でそれをやらせてくれる農家を紹介してもらいたい」と。

それで坂本さんは当時のサツマイモ事情を話した。

「うちの畑は、サツマイモの国家統制が解けてからは澱粉工場でんぷん向けの沖繩百号で埋まっている。うちの畑も澱粉イモ中心だが、自家用として味の良い太白たいはくも作っている。それでもよかったら、うちの畑に来てくれてもいいよ」となった。

次は礼金をいくらもらえれば良いかとなったとき、坂本さんの希望はこうだった。

「この辺の今の澱粉いも相場は、一反で一万円前後だ。それに見合う金額をもらえればいいよ。百姓にとつてのいも掘りは重労働だ。それをお客さんがやってくれるというのだから、

ありがたいことだね」となったそうだ。

このような、ふとしたことから始まった「イモ掘り観光」は大成功だった。東京から来たその団体は、秋晴れの一日を坂本さんの「太白畑」でキャツキャ、キャツキャとはしゃぎながら大喜びで過ごした。

それを見て坂本さんはこう思った。「サツマイモ掘り観光は川越だからこそなりたつことだ。よし、来年からは、こつちからお客さんを川越に呼び込むぞ」と。そして相手を東京の幼稚園にしぼった。幼稚園なら、幼児の親も一緒に来てくれるからだ。それで冬の農閑期になると、毎日のように手弁当で東京に行った。その幼稚園を次々に訪問し、園長先生に大地に直接触れることのできるサツマイモ掘り体験の良さを説いた。

最初の二、三年はダメだったそうだがあきらめなかった。おかげで坂本農園に来てくれる幼稚園客が増えだした。お客さんたちにとって、その結果が本当に良かったからであろう、勢いがあった。来客の団体が激増し、坂本家の家族だけでの対応はできなくなった。そこで近所の農家に、応援してもらおうことにした。その戸数は年々増え続け、最終的には十戸にもなった。

それで一九六三年のこと、関係農家との入園料・作付け計画・栽培技術研究・手洗い場や駐車場などの整備を協議するため、「川越芋掘り観光受入農園組合」を作った。

組合長はもちろん坂本さんで、副組合長は小野昌信さんだった。

おかげで東京の幼稚園を中心とする川越のサツマイモ掘り観光農園事業がますます発展した。その最盛期は一九七〇（昭和四十五）年から一九七五（昭和五十）年にかけて、入園者数は、毎年二十万人にもなった。

その賑わいの中から生まれたのが坂本長治さん作詞、西崎洋子さん作曲の「芋掘り音頭」だった。以下がそれである。

(一)

ハアー 空はからりと実りの秋に  
心うきうき おいもほり  
掘ってあそんでお芋の土産

ほんに楽しいお芋ほり  
サーサ コロコロ ヨイコラシヨ

(二)

ハアー 招く川越芋掘り来れば  
尾花りんどう花ざかり  
土の香りに心もとけて  
ほんに楽しいおいもほり  
サーサ コロコロ ヨイコラシヨ



いも掘り観光を楽しむ幼稚園児。  
川越市中台 坂本農園

(三)

ハア― 掘った掘れたの芋ほりすめば  
山のどんぐり 栗ひろい  
拾う手先に秋風そよぐ  
ほんに楽しいおいもほり  
サ―サ コロコロ ヨイコラシヨ

(四)

ハア― 江戸と川越 栗(九里)より(四里)うまい  
芋が取り持つ三百年  
残る舟唄ふねうた 川越夜舟  
ほんに楽しいおいもほり  
サ―サ コロコロ ヨイコラシヨ

(五)

ハア― 川越名物 金時芋きんときよ 味はホクホク日本一  
今はレジャーでその名も高く  
ほんに楽しいおいもほり  
サ―サ コロコロ ヨイコラシヨ



川越地方のサツマイモ畑

(六)

ハアー 秋はうれしや 収穫日和

みんなそろって芋祭り

芋ほり音頭で心も躍る

ほんに楽しい おいもほり

サーサ コロコロ ヨイコラシヨ

ちなみにこの音頭の中の「金時いも」とは、サツマイモの女王「紅赤」のことである。

#### ◆ 石油ショック

一九七三（昭和四十八）年のこと、第一次石油ショックで貸し切りバスの代金も急に上がった。それで東京方面からの客に支えられていた芋掘り観光も大きく変わった。規模を縮小し、地元客中心の経営が、「令和」になった今も続けられている。